

滋賀で人と社会と文化芸術をつなぐプロジェクト“SANPOh”
第6回 文化芸術と共生社会を考えるトークカフェ
「障害の有無を超えて人生を伝える～るんびにい美術館とであい授業」

日時：令和4年10月19日(水) 19:00～21:00

場所：オンライン

参加者：15名（うち関係者4名）

ゲスト：板垣崇志（しゃかいのくすり研究所代表／るんびにい美術館ディレクター）

ゲストは、岩手県花巻市にある「るんびにい美術館」でディレクターを務めている板垣崇志さん。知的障害がある人たちと共に長年アート活動続ける板垣さんは、障害のある人たちから見えている世界をいかにして届けられるかということに取り組んでおり、当事者がキュレーションする展覧会や、講師として中学校に出向いて人生を語る「であい授業」など、様々な独創的なプログラムを展開している。これらのプログラムの紹介を通じて、障害の有無に関わらず人と人が対等につながることにについて、お話を伺った。

○命のミュージアムについて

るんびにい美術館は、花巻市の社会福祉法人が運営する施設。アトリエ、ギャラリー、カフェ、バーカリーが併設されている。2007年の開設以来、知的障害や精神障害の作者が創造してきた表現作品を中心に扱っている。また、動物の殺処分を追ったフォトジャーナリストによる写真展や、東日本大震災を契機に生まれた表現、震災で途絶えながらも復活した伝統工芸の展覧会などを開催してきた。

その中核となっているのは、「命」について考えることのできる表現を伝える美術館でありたいという思いである。命の本質には差がないという「命の等質性」を、展示を通じて伝えることで、命について考え、結果として障害のある人への理解、民族の違いや障害の有無などの属性に関わらず人と人がつながる共生社会への理解を促していくことを目指している。

○企画展『きよしさん さなえさんなら こう展示するそうです！』について

共生社会の醸成に関して、本来主体であるべきマイノリティーではなくマジョリティーが主導していることに違和感がある。当事者たちがイニシアチブを取り、支援者が共に実現していくことが重要だと思う。

るんびにい美術館では、アトリエのメンバーである八重樫季良さん、佐々木早苗さんに展示構成をお願いし、『きよしさん さなえさんなら こう展示するそうです！』という企画展を行った。

知的障害者の作品展では、作品の発信の仕方を学芸員に任せる部分が多い。しかし、るんびにい美術館では、言葉で説明しない方たちの内面で生じている体験を可能な限りダイレクトに伝えることこそが大事であると考えた。そこで、彼らが感じている世界が具現化された展示空間の中に観客が入っていくことで、隔てられていた世界が混ざるような展覧会を企画した。

季良さん、早苗さんは、いずれも言葉でのコミュニケーションがあまり得意ではなく、現実目の前で実体化していない構想段階の企画内容を言葉で理解することが難しかった。そのため、事前に、今度の企画展の展示の方法を考えてもらいたいと思っているということだけ伝え、設営当日になってから実際の会場で、あらかじめ作っておいたギャラリーや展示作品のミニチュアを使って配置を考えてもらい、そのプランに従って実物の作品を配置していく方法をとった。

すると季良さんは、ミニチュアのレイアウトに沿って作品を展示したあと、その展示した作品の額縁にミニチュアを貼りつけ、さらにそのミニチュアに向かって礼拝し、作品の前で踊りだすなど、我々が想像もしないような行動をした。絵画と礼拝、踊りという、我々は全く別のことと思っているものが、季良さんの中ではシームレスに連続しているということに感銘を受けた。例えば、私たちが自分自身や世界を言葉で認識するより前の、0歳の頃に見ていた世界に近いかもしれない。すごく不思議なものを見たような幸せな気持ちになった。

また、早苗さんは、アトリエのメンバーの作品をところ狭しと並べるようにレイアウトした。さらに興味深かったのは、作品と作品の間隔や高さは厳密に調整する一方で、作品同士が水平になっているかは全く気にしなかったこと。美術館スタッフからは全く出てこない発想であり、まっすぐ揃えて展示した空間では絶対に生じないような気配がギャラリーの中に生じ、作品が一つ一つ本当に生きているように感じられるものとなった。

○「であい授業」について

知的障害のある当事者の方が講師となり、学校などに行って自分のことを紹介する「であい授業」という取組を行っている。このような取組自体はよくあると思うが、この事業の特色は、メインテーマがアートではなく、講師の人生だということ。受講した生徒の感想が「講師はすごい人だった」というものに留まってしまったら失敗だと捉えている。知的障害の人たちに貼られがちなレッテルを反対方向に振り切って「すごい」「誰も真似できない」という印象を持たれたとしても、自分とは違う異質な存在という扱いから本質的には何も変わっていない。何かにもとづいて評価を上げ下げされるのではなく、一人の人間として普遍的に大切な存在であると実感できること、自分も他者もみんな等しく大切な存在であるという事実に気づく体験が重要である。

「であい授業」で講師として中学校に行っている小林覚さんは、その日のコンディションによって独語が激しかったり、ずっと空中に向かってウ～と言っていることもある。そんな

時に生徒たちが自然と感じる違和感は、障害のある人を理解する出発点としてすごく大事だと思う。最初は緊張している生徒たちに、小林さんのご家族へのインタビュー映像を見せると、雰囲気が変わってくる。家族としてこの数十年をどのように生きてきたのかを知り、目の前の人が誰かにとって、存在しなければならない人だと知ると、それまで「障害者」というステレオタイプな認識でしか見ていなかった存在から、「覚さん」という一人の人への認識に変わる。

取組を行う上で、時には批判などがあるかもしれないが、受身ではなくて出向いていくことが重要。それによって、出会った方に大きな影響を与えられることがある。

○参加者との質疑応答

Q 1 であい授業で、サポートする側のスタッフに求められることは何か。

A 1 障害当事者である講師の方をパートナーとして大切な人だと実感できることだと思う。他者を大切に思うことは簡単なことではない。自分と他者との間を隔てているものは何だろうと考えながら寄り添う時間を経て、自分が素直に心を開くことができた時に、他者から自分のことを信頼に足る人間だと思ってもらえるようになると思う。

Q 2 以前、障害福祉施設で働いていた時に、表現の時間があったが、こちら側が用意したものを押し付けるだけの表現になってしまい、当事者たちから出てきたものをうまく受け取って伸ばすことができなかった。どうすれば自分らしい表現に出会えるのか、また当事者自身が自由に表現していいと思えるのだろうか。そのために、周りにいる者に何ができるだろうか。

A 2 一つは、適した道具が必要である。当事者ひとり一人が、表現したいことを表現するために必要な道具がきちんと準備してある環境を作ること。もう一つは表現したいことを自由に表現してもよいという空気というか、その空気を生み出す価値観が重要である。その場にいる職員の影響によって全く違う作品になることがあり得る。いろんな表現を肯定できる人がそこに立ち会い、作家本人の内的な動機を大切にするという価値観が重要である。

○参加者の感想

・知的障害のある作家による展示構成をサポートする話では、展覧会の主体は作品を生み出した作家自身であるが、今まではこれが当たり前ではなかったということに、本末転倒な事だと共感した。

・であい授業の取組では、作家自身を知ってもらう事で、授業に参加する人たちの視点や認識が変わっていき、相手を属性で見なくなるという過程にとっても心が動いた。

- ・板垣さんのお話の中で「いのちに気づく体験をたくさんするべき」「外集団均質化バイアス*が、一人の人を知ることバイアスがなくなっていく」「その人の表現の中に表されている内面的なものを、どこまで深く見ていけるのか」等、数々の大切な言葉を伺うことができた。

*外集団均質化効果（外集団同質性バイアス）…自分が属している集団の外にいる集団を同質的なものとみなすこと。

- ・知的障害のある方が参加する芸術活動の現場で、時折、障害当事者の方とその保護者の方との関係について考えさせられることがある。ワークショップにうまく参加できない子どもをお母さんが叱ったり、逆に子どもがお母さんに任せっきりにしまったり。正解や正しい方法はないと思うが、板垣さんのお話から、当事者の自発的な表現を大事にしながらも、一番大事な存在である家族に対しどう向き合うか、ヒントをいただけたように思った。